

発言



休校中今こそやさしさを

渡辺 憲司 自由学園最長学部長・立教大学名誉教授

新型コロナウイルスの感染拡大で、長期にわたる休校措置が続く。

50年以上、中学・高校・大学の現場で働く教員として、未曾有の経験だ。私の中で暗雲が広がる。学校が再開したとしても、喜びの陰で偏見や差別が生じるのではないか。人権教育の脆弱さへの懸念だ。

昨年、感染症の学会で、明治以来の近代化により新たな性差別や偏見が生まれていると話をした。学会後の懇親会で、一人の医師のつぶや

きが忘れられない。

「感染症はもちろんまん延が恐ろしい。しかしもっと恐ろしいのは病に対する差別と偏見が続くことだ」

特効薬が見いだされ、日常生活での人から人への感染が完全に否定されたにもかかわらず、長く人権が無視された例がある。ハンセン病に対する隔離政策、エイズに対する就職差別である。

感染症に限らない。水俣病の患者に対しての差別が、水俣出身の子ど

もたちに及んだこともあった。感染症ではないが、福島第一原発の事故以降の放射能汚染に関連し子どもたちへのいじめがあったことも報道された。

世界中でコロナ感染者に対する差別が拡散している。学校現場にも、心無い差別の波動は訪れるに違いない。それに教師はいかに立ち向かうべきか。

インターネット活用による授業の補完も続けられ、その準備に現場の

教師は忙殺され疲弊している。ネット授業は教育システムの新たな段階を生むであろう。その価値は大きい。未来も感じる。

しかし、日常生活の中で平等に教育するという基本的思想が見落とされるのが危惧される。人間と人間が向き合わなければ教育はその理想を追うことはできない。学習効果の向上は教育の第一目的ではない。

「やさしさ」を思想化すること、感性の中から「人権」堅持の理性をはっきりと掲げ、毅然たる態度で、

生み出すのが教育の最大の目的だ。このことを忘れずに、私たちは学校再開を迎えなければならぬ。

今、教師がとみなすべきことは、差別と偏見の歴史を直視することだ。負の歴史を学ぶことを明日への正義につなげなければならぬ。毅然と口を見つめなおすことだ。私たちのすぐ傍らに、奈落への断崖があることを認識すべきだ。自らのプライドは真つ逆さまに突き落とされかねない。教師自身が渦の中に取り込まれ差別者になる危機もある。

精神は不安で揺らぐ。しかし、このような時こそ、人間の尊厳が試されている。歴史を学び、正義の旗をはっきりと掲げ、毅然たる態度で、

教師は児童・生徒・学生に接しなければならぬ。彼らのストレスは一滴の水で差別と偏見にあふれかえるだろう。コロナ対策は、差別なき社会のありようを決める教育現場の試金石でもある。

医療崩壊を第一に阻止しなければならぬ。そして次に訪れるのは、教育崩壊の危機だ。文部科学省にその危機感を感じ。政府は、教育現場を支えるためにいかなる人権教育を指針とするかを早急に準備し、警鐘を鳴らす必要がある。

わたなべ・けんじ 東日本大震災の折、卒業生に送った「時に海を見よ」が話題になった。